感情表出動詞の文法的特徴

山　岡　政　紀

0．はじめに

山岡（1998）では，感情動詞を〈感情表出〉という文機能[1)]との関連から三つに分類した。そして，特にそのうちの感情表出動詞について，それを述語とする文の類型を行い，できるだけ多くの語彙を記述することを試みた。

本稿では，感情表出動詞の文法的特徴について検討する。第一には，接辞 -tei- を伴わない動詞文において一種の状態性が発生するというアスペクト上の性質について，文機能そのものの性質から考察する。第二には，感情表出動詞と感情描写動詞とがアスペクト的性質において共通しているにもかかわらず，なぜ前者はル形終止で〈感情表出〉となり，後者は〈感情表出〉とならないのか，について項構造の違いを指摘する[2)]。

1．問題の確認——感情表出動詞とは何か

本節では，山岡（1998）で論じた内容の再確認を行う。〈感情表出〉とは，話者が発話時の自らの感情を表出する文機能[1)]である。文の述語がル形終止となった場合に，その文機能が〈感情表出〉となるような動詞語彙を(A)「感情表出動詞」と呼ぶ。「腹が立つ，いらいらする」などはこれに当たる。次に，同じくタ形終止の場合に〈感情表出〉となる語彙もいくらかある。つまり，過去形でありながら時制意味が現在となるという特殊な用法である。この用法を持つ動詞語彙を(B)「感情変化動詞」と呼ぶ。「あきれた，困った，足がしびれた，腹が減った」などがこれに当たる。そして，ル形終止でもタ形終止でも〈感情表出〉とならず，しかも語彙的意味としては(A)，(B)と同様の意味特徴を持つ動詞語彙を，感情の動きを客観的に描写する動詞として(C)「感情描写動詞」と呼ぶことにする。先に述べた「怒る，悩む，悲しむ，苦しむ，喜ぶ」などはこれに当たる。(C)を用いて話者自身の感情を表出しようとする場合は，テイル形をとらなければならない。その場合も，人称指定が発生しないため，人称指定による第一人称経験者[3)]の省略はできない（文脈や場面などからの省略はあり得る）。(A)～(C)を総称した全体が「感

情動詞」である。

［表１］はこの三種の分類を一覧にしたものである。下位分類として四種を立てたが，これは(A)～(C)に横断的に見られる下位分類である。(S)の評価用法は，〈感情表出〉との性格の違いが顕著である。語彙としては感情描写動詞が用いられているので用法として扱う。これについては詳細を別稿に譲る。

［表１］　感情動詞の三分類と下位分類

	１思考	２情意	３感覚	４知覚	S評価用法
(A)感情表出 ［I］＋V-ru	A-1思考表出 ～ト(～ク)思う	A-2情意表出 困る	A-3感覚表出 胃ガ痛む	A-4知覚表出 見える	S-A 評価表出 (～ニ驚く)
(B)感情変化 ［I］＋V-ta	B-1思考変化 ひらめく	B-2情意変化 あきれる	B-3感覚変化 肩が凝る		S-B 評価変化 (～ニ驚いた)
(C)感情描写 I＋V-teiru	C-1思考描写 ～ヲ思う	C-2情意描写 怒る	C-3感覚描写 顔がほてる	C-4知覚描写 見る	

※左端の欄に記載されている文型表示では，［I］は省略可能な第一人称経験者，Iは省略不可能な第一人称経験者(文脈や場面などによる省略は別とする)，V(動詞部）の後は，テンス・アスペクト接辞（いずれも異形態あり）を表している。

こうして定義された「感情表出動詞」の例文として，山岡（1998）の冒頭では(1)を掲げた。この文は，発話者が発話時における発話者自身の感情を，動詞述語のル形終止を用いて表出する〈感情表出〉文である。二つの文法的特徴とともに再掲する。

(1)　ああ，腹が立つ。

→文法的特徴①文の時制意味が「現在」である

②経験者[3]が第一人称に指定される

①は通常，状態動詞の特徴とされ，そのル形終止を述語とする文の時制意味が「未来」となる動作動詞と対立している。②は命令や意志などのモダリティに見られる人称指定の現象と類似している。これらの特徴は，「感情表出動詞」が述語用法において持つ特徴である。

感情形容詞文でも，この①②に該当するものは〈感情表出〉文であり，両者の意味内容，表現効果はほとんど同じのように思える。比較のために語根が共通するものを並べてみた。語彙の近親性以上に，構文の近親性に注目したい。なお，

＋［I］^{Ex}は，指定された第一人称経験者が形式に表れなくとも意味的に含意されていることを示す。

(1) a．ああ，腹が立つ。＋［I］^{Ex}

b．ああ，腹立たしい。＋［I］^{Ex}

(2) a．胃が痛む。＋［I］^{Ex}

b．胃が痛い。＋［I］^{Ex}

「感情表出動詞」が動詞分類の中でどのように位置づけられるかについてまともに言及した先行研究は，これまでなかった。金田一（1950）に始まるとされる，アスペクト的特徴からの動詞分類においても，感情動詞については意識的に言及が避けられているようであった。それもそのはずで，感情を表す動詞の語彙的意味とアスペクト的特徴との間に必然的な関係が見いだしにくいからである。

例えば「怒る」は，述語ル形終止で〈感情表出〉とならないため，「感情描写動詞」に分類されるが，意味特徴としては「腹が立つ」と極めて近い。感情表出動詞「いらいらする」と感情描写動詞「苛立つ」の関係も同様である。

(1) a．　ああ，腹が立つ。＋［I］^{Ex}

b．＊ああ，怒る。

(2) a．　ああ，いらいらする。＋［I］^{Ex}

b．＊ああ，苛立つ。

このように，語彙的意味においては極めて近いのに，どうして感情表出動詞と感情描写動詞とに分かれるのかということについて，説得力のある解答は先行研究において見出されていない。本稿では，こうした問題意識の上から，感情表出動詞の文法的な特異性をどこに見出せばよいかについて，考察するものである。

2．感情動詞のアスペクト上の特徴

2.1．テイル形について

他人の感情を描写する構文(1)，(2)それぞれのａ，ｂを見比べてみて，両者のテイル形のアスペクト意味にはほとんど差異がない。「怒る」や「苛立つ」は〈感情表出〉文を作れないのだから，動作動詞の一種とするしかない。そのテイル形と差異がない以上，「腹が立つ」や「イライラする」も，アスペクト基準の動詞分類では，別な範疇化を行うわけにはいかない。

(1) a．山田次郎は政治家の怠慢に腹が立っている。　〔感情表出動詞〕

b．山田次郎は政治家の怠慢に怒っている。　〔感情描写動詞〕

(2) a．バスを待つ男はいらいらしていた。　〔感情表出動詞〕

b．バスを待つ男は苛立っていた。　〔感情描写動詞〕

この点からは，次のように言える。

「感情表出動詞」と「感情描写動詞」を隔てるのは，アスペクト上の違いではない。

動作の継続か，変化結果の継続かという点では，これらはすべて動作（感情）の継続である。ただし，感情表出動詞と感情変化動詞はアスペクト的に異なる。それぞれ継続動詞と変化動詞に対応する。感情描写動詞には，継続動詞と変化動詞が混在している。

2.2. 他のアスペクト形式の付加について

「～ハジメル」は，過程性を有する動作動詞にのみ付加し得るアスペクト形式である。これらが付加し得る動詞は，状態動詞とは言えない。従って，この点からは「腹が立つ」は状態動詞ではない。

(1) 正夫は腹が立ちはじめた。　(1)′ 雨が降りはじめた。

また，開始的実現の「～テクル」も付加できる。

(2) 正夫は腹が立ってきた。　(2)′ 雨が降ってきた。

ただし，補助動詞「～オワル」，「～テイク」は付加できない。

(3)＊正夫は腹が立ちおわった。　(3)′＊雨が降り終わった。(降り止んだ)

(4)＊正夫は腹が立っていった。　(4)′＊雨が降っていった。

感情の成立に際しては，動作性が認められているが，一度成立した感情の進展や終結には意識が及ばない，と考えられる。森山（1983）は，～オワルをつけることができるのは，動きの全体量が決まっているものに限られると指摘している。従って，「雨が降る」などの継続動詞もほぼ同じ振る舞いを見せる。「腹が立つ」を感情描写動詞「怒る」に入れ替えても，文法性は変わらない。従って，次のように言える。

「感情表出動詞」はアスペクト的には（感情描写動詞と同じく）動作動詞である。

要は「状態性」を持っていないということだが，更に細かく言うと「継続動詞」である。

2.3. 感情表出動詞のル形の時制意味

文脈によって，時制意味が未来となったり，現在となったりする。

(1) 息子は遊んでばかりで困ります。＋［I］^{Ex}（感情表出→現在）

(2) 君，遊んでばかりいると今に困るよ。　(予告→未来)

(3) さすがのあの男も，これでは困るにちがいない。
(推量→未来)

(4) あいつ，ずいぶん困るみたいだ。　(感情描写→現在)

(5) ああ，腹が立つ。　＋［I］Ex (感情表出→現在)

(6) 君，あの男と話してごらん。きっと腹が立つよ。
(予告→未来)

(7) こんなことでは，みんな腹が立つだろう。　(推量→未来)

(8) あいつ，かなり腹が立つらしい。　(感情描写→現在)

結局，2.2.でも述べたとおり，「感情表出動詞」は，動詞の意味特徴としては状態性を持っていない。〈感情表出〉そのものや，〈感情描写〉の場合に，発話時との「同時性」が保証され，そのため，時制意味が現在となる。それが「状態性」と見なされている。これを整理して次のように言える。

〈感情表出〉の成立は，発話時との同時性という，一種の状態性を発生させる。

3．動詞による〈感情表出〉文のテンス・アスペクト上の特徴

3.1. 動詞による〈感情表出〉文の状態性

しかし，動詞による〈感情表出〉文の状態性は，状態動詞・形容詞がもともと持っている状態性や，テイルによって与えられる状態性と異なる。

(1) ああ，腹が立つ。＋［I］Ex (感情表出動詞→〈感情表出〉文)

(2) きのうからずっと家の前に犬がいる。(状態動詞)

(3) きのうからずっと腹立たしい。＋［I］Ex (感情形容詞)

(4) 私はきのうからずっと腹が立っている。(テイル)

(5)＊私はきのうからずっと腹が立つ。

(2)〜(4)における状態性は，その状態が継続中である中の一点として発話時がある，と言える。

(4)は経験者が第一人称だが，発話時の感情状態を含むものの，その状態性が発話時に限定されていないため，「きのうからずっと」の有無にかかわりなく，自身のことをある程度の時間の幅を持って振り返った表現となり，その意味では，客観的な描写・報告という性質を帯びる。その時間の幅の中の一点である発話時の部分のみ〈感情表出〉の機能を持つことになるため，〈感情表出〉を一部含ん

だ〈感情描写〉とも言える。

3.2. 時間的要素が引き起こす動作性

動詞による〈感情表出〉文は，時間性，アスペクト性そのものと相容れない。「きのうからずっと」のかわりに，「今」をつけても非文となる。

(1) 私は今，腹が立っています。　(テンス副詞「今」＝現在)

(2) 私は今，ドキドキしています。　(　〃　)

(3)？私は今，腹が立ちます。

(4)？私は今，ドキドキします。

ただし，(5)のように，テンス副詞が係助詞や副助詞で取り立てられていると受容度が高まる。他の時点と相対された現在時という意味になり，絶対的発話時への限定が薄らぐためか，と考えられる。

(5) 私は，あの頃は平気だったが，今は腹が立つ。

テンス副詞と共起すると動作性を帯びてしまう。アスペクト副詞も同様である。

(6)＊次第に（／＊突然／＊とうとう）腹が立ちます。(アスペクト副詞)

(7)は非文ではないが，発話時に限定されない超時的表現，いわゆる習慣的現在となり，〈感情表出〉文ではなくなる。

(7) 私は（／正夫は）よく腹が立つ。(頻度副詞→〈感情表出〉文ではない)

これらの現象は，時間的要素と結びついたときに，感情表出動詞が動詞としてもともと持っていた動作性（動詞的性質）を呼び起こしてしまうためと考えられる。

4．〈感情表出〉の文機能からの制約

感情表出動詞文が常に〈感情表出〉文となるとは限らない。そのことを文機能論の理論的枠組みから確認しておきたい。

〈感情表出〉という文機能の「発話時の話者の主観内に私的に表れている何らかの感情の状態を他者に伝達するために言語化する」という機能的特徴は普遍的なものと考えてよいが，それが構文に対して課す制約は，当然，個別言語の構造によって異なる。

日本語において，感情動詞の語彙的意味は，単に「感情」であって，〈感情表出〉という文機能を果たすために必要な，“話者の”とか，“発話時の”といった制限的な意味をもともとそなえているものではない。従ってそれは，日本語の構文に

一定の条件を課すことになる。このことは，命題内容条件の中に反映されている。まず初期条件について，以下の通りである。

〈感情表出〉の命題内容条件（初期）

①述語が感情性述語であること
②主語が第１人称経験者[3]であること（[Ｉ] Ex）
③非過去時制辞を接続すること
（ただし，述語が感情変化動詞の場合は，過去時制辞を接続すること）
④モダリティ付加辞を接続しないこと
⑤アスペクト接辞-tei-を接続しないこと

この第一条件の感情性述語を「感情表出動詞」に指定すると，次のようになる。

〈感情表出〉の命題内容条件

A　述語が感情表出動詞である場合
②主語が第一人称経験者であること
③非過去時制辞-ru-を接続すること
④モダリティ付加辞を接続しないこと
⑤アスペクト接辞-tei-を接続しないこと

ここでは，「腹が立つ」を感情表出動詞とし，例文によって命題内容条件を確認したい。

(1)　ああ，腹が立つ。　＋［Ｉ］Ex
(2)　次郎はきっと腹が立つ。　（Ex＝三人称，未来時制意味）
(3)　次郎は政治家の怠慢に腹が立っている。
（Ex＝三人称，アスペクト接辞あり）
(4)　次郎は政治家の怠慢に腹が立つらしい。
（Ex＝三人称，モダリティ付加辞[4]あり）
(5)＊私たちは皆，腹が立つ。
(6)　私たち国民は皆，政治家の怠慢に腹が立っている。
（Ex＝一人称複数，アスペクト接辞あり）

例文(1)～(6)の中で，〈感情表出〉文は(1)だけである。(2)～(4)は三人称の経験者（Ex）が主題となっており，条件②に反する。

(2)は「次郎が星を見る」のような文と同様で真偽値がある。検証可能な客観的現象としての状態だからである。その文機能は〈事象描写〉である。一方，(1)は

「星が見える」のような文と同様で真偽値がない。検証不可能だからである。誠実な発話であるか否かについては，話者自身に限ってその違いはあるが，それを真偽値にするということは真理関数の基本的原理に合わない。要するに，本当には腹が立ってはいなかったとしても，(1)を発話すれば，その〈感情表出〉は間違いなく遂行されてしまう。その意味では常に真だと言ってもよい。

(3)，(4)は，時制意味は現在だが，それぞれアスペクト接辞，モダリティ付加辞がついている例である。(3)の主題「次郎は」がなかったとしても，〈感情表出〉文ではなくなる。そのことを表しているのが条件④，⑤である。(5)，(6)は経験者が一人称複数であるような例だが，(5)は非文であり，(6)は非文ではないけれども，〈感情表出〉文とは言えない文である。このように，〈感情表出〉文が成立するかどうかは，「腹が立つ」という語彙だけで決まるわけではない。このことは感情形容詞による〈感情表出〉の場合と全く共通している。なお，(3)，(6)は〈状態描写〉であり，(4)は〈事象描写〉である。

また，「〈感情表出〉行為」は命題内容自体が「心理状態」という「状態」であることが求められる。なぜ，そうであるかという議論は言語哲学か，せめて認知科学の領域にならざるを得ないが，やはり「現在時」との完全な同時性に由来するのではないだろうか。しかし，日本語において，感情動詞の語彙的意味は，そのような制限的意味をもっておらず，従ってそれが〈感情表出〉文に一種の状態性を付与する。

このことは普遍的なことではない。例えば，英語の感情動詞 fear, want, like, believe, etc. は語彙的意味の中に状態性を含んでいる。非過去形，第一人称主語の時に実質上，〈感情表出〉となるが，〈感情表出〉と〈感情描写〉に同じ様式が用いられるため，この点に於いて，文機能の違いが言語構造の違いに反映していないと言える。

5．〈感情表出〉と項構造——ヲ格を取らないこと

〈感情表出〉文が状態性を発生させることを認めても，「感情表出動詞」だけがそれに適していて，「感情描写動詞」がそれに適さないのはなぜだろうか。それは両者の項構造の違いに原因があるのではないかと考えられる。

一つの問題提起として，次に示す「感情表出動詞句」と「感情描写動詞句」のペアを見てみたい。ここにはヴォイス的な対立が見られる。

(1)　感情表出動詞——感情描写動詞

気になる――気にする
腹が立つ――腹を立てる
心が痛む――心を痛める
愛想が尽きる――愛想を尽かす

これらから，「感情表出動詞」が共通してヲ格を取らないことが見て取れる。感情表出動詞の対象（Ob），あるいは原因（Ca）の項にはガ格かニ格が用いられる。(2)，(3)はいずれも，感情表出動詞文による〈感情表出〉である。

(2) a．　あの言い方が癪に障る。
　　b．　あいつの顔が気になる。
(3) a．　あの言い方に虫酸が走る。
　　b．　君の愚かさには愛想が尽きる。

ニ格なのかガ格なのかは，単に成句中で使っていない方の格助詞を用いているに過ぎない。つまり，「癪に障る」と「虫酸が走る」とで，〈対象〉の取る格が異なるのは，成句の語源的な問題に帰着するだろう。　しかし，ヲ格を成句中に含む「腹を立てる，心を痛める，愛想を尽かす」は〈感情表出〉にはならないのである。そして，成句中にヲ格を含まない「気にする」さえも，対象を取る格がヲ格であるあることに気づかされる。(4)は，経験者（Ex）と対象（Ob）の項構造までを含めた両者を対比したものである。

(4)　　感情表出動詞句　――　感情描写動詞句
([Ex] は) [Ob] が気になる―― [Ex] が [Ob] を気にする
([Ex] は) [Ob] に腹が立つ―― [Ex] が [Ob] に腹を立てる
([Ex] は) [Ob] に心が痛む―― [Ex] が [Ob] に心を痛める
([Ex] は) [Ob] に愛想が尽きる―― [Ex] が [Ob] に愛想を尽かす

両者を，自他動詞のように，共通の項構造から派生したものと仮定すると，感情表出動詞は，経験者以外の項が主語化された場合の派生形ということになる。この場合，経験者が命題の外に追い出される。そして，命題からはみ出た項は主題としてのみ言語化し得る。

そのことの傍証として，〈感情表出〉文の経験者にガ格を付与すると必ず総記の解釈になる。本来，助詞ハで示されるべき主題がガ格で示されると総記の解釈になる。

(5)　「私はその問題は気になりません」「でも，私が気になります」
(6)　「こんなことで腹が立つやつはいるだろうか」「課長が腹が立つらしい」

感情表出動詞が主観性を強めるとき，経験者を語彙的意味の中に取り込んでし

まい，背景化する。それがいわゆる主題である。従ってその経験者は話者自身であるのが自然である。これによって，形式上無主題の文が第１人称経験者を主題として含意した有題文である，と認められ，〈感情表出〉の命題内容条件を満たすことになる。

(7)　感情表出動詞句 —— 感情描写動詞句

([Ex] は) [補文] ような予感がする —— [Ex] が [Ob] を予感する

([Ex] は) [補文] ような感じがする —— [Ex] が [Ob] を感じる

([Ex] は) [Ob] が聞こえる —— [Ex] が [Ob] を聞く

([Ex] は) [Ob] が見える —— [Ex] が [Ob] を見る

([Ex] は) [補文] と思う —— [Ex] が [Ob] を思う

このような同語根の対応語彙をもともと持たない感情表出動詞句においても，経験者は動詞の必須項であることをやめ，動詞の語彙的意味の中に取り込まれる。

(8)　感情表出動詞句

([Ex] は) [Ob] にむかつく

([Ex] は) [Ob] に照れる

([Ex] は) [Ob] に鳥肌が立つ

([Ex] は) [Ob] が頭に来る

経験者に対する視点の置きやすさには順位があって，久野（1978）のようにハイアラーキーで表現することができるが，言うまでもなく，最も経験者に視点を置きやすいのは「話者自身」である。従って，経験者のデフォールトは第１人称なのである。

〈発話当事者の視点ハイアラーキー〉

話し手は常に自分の視点をとらなければならず，自分より他人寄りの視点をとることができない。

１＝E（一人称）＞E（二・三人称）

以上，見てきたような，感情表出動詞の項構造は感情形容詞と共通している。(9)に列挙したのは，感情形容詞と感情描写動詞との間に同語根の対応関係があるものを６組挙げたものである。感情形容詞の残りの３語は，対応する動詞はないけれども他の６語の感情形容詞と同じ構造である。

(9)　感情形容詞 —— 感情描写動詞

([Ex] は) [Ob] が悲しい —— [Ex] が [Ob] を悲しむ

([Ex] は) [Ob] が楽しい —— [Ex] が [Ob] を楽しむ

([Ex] は) [Ob] が苦しい —— [Ex] が [Ob] を苦しむ

([Ex] は) [Ob] が惜しい―― [Ex] が [Ob] を惜しむ
([Ex] は) [Ob] が悔しい―― [Ex] が [Ob] を悔やむ
([Ex] は) [Ob] が恥ずかしい―― [Ex] が [Ob] を恥じる
([Ex] は) [Ob] が辛い
([Ex] は) [Ob] が嬉しい
([Ex] は) [Ex=肉体部分] が痒い

このようにして見ると感情表出というのは，本来ヲ格を取ってもおかしくない動詞の形をとりながらも，感情形容詞と同じ文機能を担い得るように，共通の項構造を持っていることがわかる。(10)は，感情表出動詞・感情形容詞・感情描写動詞の三者に同語根の語彙があるもの二組について，その関係を示したものである。感情表出動詞と感情形容詞とが組になっていることが一目瞭然である。

(10)　感情表出動詞句・感情形容詞　――　感情描写動詞句

([Ex] は) [Ob] に腹が立つ
([Ex] は) [Ob] が腹立たしい
} ―― [Ex] が [Ob] に腹を立てる

([Ex] は) [Ex=肉体部分] が痛む
([Ex] は) [Ex=肉体部分] が痛い
} ―― [Ex] が [Ob=肉体部分] を痛める

ただし，感情描写動詞句にもヲ格を取らないものがある。「～に怯える，～に悩む，～に飽きる，～に惚れる，～が気に障る，～にクヨクヨする，～にションボリする」などである。従って，ヲ格を取らないことは感情表出動詞であるための必要条件であって十分条件ではない。

この点に関する例外として，《対人的情意表明》という特殊な発話機能[5]をもたらす感情表出動詞について述べる。「疑う，恨む，軽蔑する，信じる，尊敬する」などである。これらは対象をヲ格で表すが，しかも〈感情表出〉文となる。

(11)　僕は君を憎む。
(12)　私は先生を尊敬します。
(13)　あいつを信じるよ。

これらは，単に話者の情意を表明するだけでなく，話者が他者との間に「このような人間関係を築きます」という一種の宣言的な効力をもたらす。この効力は《意志表出》系の発話機能と共通性を持ち，経験者に一種の意志性を付与する。このようにコントローラブルな経験者は主題として背景化することなく，命題中の項を占める。従って動作動詞と同じ構造を取る。このことの検証として，命令文＝化のテストをしてみよう。〈命令〉の第二人称主語が動作主（Ag）であることは，大前提である。

⑭＊社長に腹が立て。

⑮？社長に腹を立てろ。

⑯　社長を信じろ。

まず，⑭は命題構造内に意志性を付与することが可能な項が存在しないので，構造自体が命令文にそぐわない。⑮はガ格の経験者を動作主に入れ替えれば可能になる。ただし，「そういう気持ちになれ」という，異常なおしつけの感がぬぐえない。ところが，⑯には違和感が全くない。つまり，⑯の経験者はもともと意志性をそなえた，動作主に近い経験者だったということが，このテストで確認できるのである。

Searle（1979）などが Expressives の例として挙げているのはこの種の《対人的情意表明》に当たるものが中心になっているが，それは英語の感情動詞における項構造上の特徴に起因するものであろう。この点については，今後の課題としたい。

注

1）山岡（1998）の段階では，Searle らの発話行為論における「発話内行為（illocutionary act）」をそのまま援用して論述した。筆者はそれと並行して，発話行為論を日本語の文機能を記述する理論として，より厳密に整足させる作業を行ってきて，一応の完結をみた（山岡（未発表））ので，本稿においては，山岡（1998）で発話内効力としたものをすべて「文機能」と言い換えている。また，他の用語との差別化のために，〈　〉を用いて表記している。

文機能の類型と名称についての筆者の立場をごく簡略に図示すると，以下のようになる。カッコ内は主たる述語の品詞。これらの機能を有する文の名称として，そのまま「～文」をつけて用いる。

文機能			主たる述語の品詞
遂行			遂行動詞
表出	感情表出		感情形容詞，感情動詞
	意志表出		意志動詞
命令			意志動詞
演述	描写	事象描写	動詞
		状態描写	状態相の動詞，形容詞
	叙述	関係叙述	名詞，関係動詞
		属性叙述	形容詞，名詞，動詞

2）感情変化動詞のアスペクト的性質については，別稿にて詳しく論じることとする。

3）文機能の命題内容条件によって意味的に指定され，形式の有無を問わない名詞句の記述には，ガ格やニ格といった形式格を用いるのは適切でない。本稿では意味格によって

記述する。本稿で用いたのは，経験者格（Experiencer；略称 Ex），動作主格（Agent；同 Ag），対象格（Object；同 Ob），原因格（Cause；同 Ca）の四つである。

4）筆者は，時制辞（-ru, -ta, -i, -katta など）に下接するモダリティ形式 -daroo, -rasii などをモダリティ付加辞と呼んでいる。山岡（未発表）で詳しく論じている。

5）筆者は，Searle の発話内行為のうち，命題内容条件のみによって規定されるレベルを文機能とし，語用論的条件（Searle の準備条件に相当）の充足を必要とするものを発話機能として区別する。山岡（未発表）で詳細に論じている。文機能と区別するために，《　》を用いて表示する。

参考文献

金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」（金田一編（1976）所収　5-26）

————編（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房

草薙　裕（1994）「日本語における非過去形のテンスとアスペクト」『森野宗明教授退官記念論集　言語・文学・国語教育』三省堂　119-133

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房

久野　暲（1978）『談話の文法』大修館書店　第2章視点　129-282

たかきかずひこ（1997）「対立する形にみえる慣用句の意味(1)」『日本文学研究』第三十六号大東文化大学日本文学会　196-178

高橋太郎（1985）『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』（3．2．4 基本形が現在の事象を表す場合）くろしお出版

堀川智也（1992）「心理動詞のアスペクト」『北海道大学言語文化部紀要』21　187-202

前田富祺（1996）「感性動詞語句とは」『日本語学』第十五巻第三号　明治書院　4-9

町田　健（1989）『日本語の時制とアスペクト』アルク

森山卓郎（1983）「動詞のアスペクチュアルな素性について」『待兼山論叢』17文学篇　1-22

————（1990）「モダリティ」『日本語学』第九巻第十号　明治書院　83-89

山岡政紀（1998）「感情表出動詞文の分類と語彙」『日本語と日本文学』創価大学日本語日本文学会　(1)-(17)

————（未発表）「日本語の述語と文機能の研究」

SEARLE, J. R.（1979）Expression and Meaning : Cambridge University Press

SEARLE, J. R. and D. VANDERVEKEN（1985）Foundations of Illocutionary Logic : Cambridge University Press

付記

本稿は第十回日本語文法談話会（学習院短期大学）での口頭発表の内容に修正を加えてまとめたものである。発表に対して諸先生より有益なコメントを頂戴した。謹んで御礼を申し上げます。

（やまおか・まさき，本学助教授）